

23

レオナルド・ダ・ヴィンチの解剖手稿 KP162r の
制作プロセス

永田 和弘

東北大学歯学部

レオナルド・ダ・ヴィンチは「モナ・リザ」や「最後の晩餐」で有名であるが、これらの絵画作品以外にも手稿と呼ばれるノートが3,760枚の紙葉に残されている。その中の「解剖手稿」200枚の紙葉はイギリスのウィンザー城にあり、その内28紙葉は心臓に関係するものである。中でもKP162rは心臓に関するレオナルド最後の記述であり、「心臓に肺から空気が侵入するかどうか」に言及する興味ある紙葉である。KeeleとPedrettiによるとKP162rは中央に心臓と気管支など4つの画像と、その周囲の20の文節とから構成されているとしている(1978)。レオナルドの記述には、他の紙葉を通覧するとき、右上から左下に文節が配置される傾向がある。加えて、KP162rは文節が混み合っており、後から書き加えられた文節は先に書かれた図や文章を避けるようにして記述がなされている。そのことにより、20の文節の書き加えられていった順序過程が推測できる。文節の記述過程が分かると、レオナルドの思考の過程が分かり、図単独では分からなかったことが思考の過程から図の新しい解釈が可能となってくる。今回は文節の記述過程を推測することにより、レオナルドの思索過程を辿ってみたい。(カッコ内番号はKeeleとPedrettiによる文節番号)

最初は心臓の血管を描くつもり(1)で始めた作画であった。そのために、描いた心臓のみの図(図1)は紙葉の上方4分の1にある。しかし、レオナルドに心境の変化が生じて心臓と肺と気管支の関係について述べたい気持ちになってきた。書き始めた図では気管支や気管支動脈の起始部は紙葉の外に出てしまう。そこで強引に現在の心臓の図の上方に気管と気管支を書き加えた。気管支動脈の起始部が妙な所にあるのはこのためである(図1)。当時は血管は静脈だけで、動脈には血液ではなく空気が流れていると考えられていた。レオナルドは動脈は血管であることを確信していたが、どうして肺に動静脈の2重配置が必要なのかが分かりかねていた。この疑問への考えを「覚書」(3)に記す。

図が途中まで出来上がったとき、レオナルドは文と口は達者だが絵を描くことはだめという人々に、絵画こそが文よりも重要な伝達手段であることをこの図譜でもって示したい衝動に駆られた。ここで少し寄り道をして、文筆家をしたためる。「眼に関わることを耳から入れようと思っはならない」(4)

レオナルドには書くべきか書かざるべきか悩むことがあった。当時は、血液は右心室から心臓中隔を通して左心室に流れ込むと考えられていた。しかし、「心臓の中隔には小孔はない」とレオナルドは考えていた。「空気は心臓の中に侵入するか否か」と章立てをして、見たとおり考えた通りのことをそのまま書いた(5)。しかし、どういう事で他人が見るやも知れぬ。「この点については、私が現在行っている解剖をし終るまで、私の説が正しいというのは差し控えよう」という文章を最後に付け加えた。

この紙葉の最後は呼吸と排便の関連であり(20)、この文節の最後の文章は無理やり押し込まれるように書き込まれている。そこまでしてでもレオナルドが是非とも書いておきたかった文は「子宮の中の胎児のためにも、母親はしっかりと呼吸をしなくてはならない」であった。

なお、図左下部に見られるアルファベット“A”はレオナルドの記入によるものではない。心臓に関するシリーズの内、8紙葉については新しいものから順番にA~Rの連番が付されている。これはレオナルド自身が順番を狂わさないで所持していたと考えられ、生前または没後に順序の重要性を知った人物が連番を書き込んだと思われる。これよりKP162rが心臓シリーズの最後の紙葉であることが推察される。